ぼくはきみの友だちだ

劉心武作 石田聡訳 永沢まこと絵

[訳者]
石田稔(いしだみのる)
1947年岩手県に生まれる。早稲田大学大学院中国文学科修了。
中学校の国語教諭を経て、現在は中国児童文学の
研究、翻訳をしている。訳書に『ニーハオ! 小坡(シャオポー)』(共訳・大平出版社刊)他。
中国児童文学研究会会員。

[ぼくはきみの友だちだ]
我是你的朋友
劉心武著
永沢まこと絵
石田稔訳
福武書店 1987
176P, 21cm NDC929
原題:我是你的朋友

ぼくはきみの友だちだ◉定価1100円

1987年12月10日 初版印刷
1987年12月15日 初版発行©

訳者:石田稔
装丁:前田浩志・山崎英樹
発行所:福武書店
〒102 東京都千代田区九段南2-3-28 Tel.03-230-2131㈹ 振替・東京9-166266

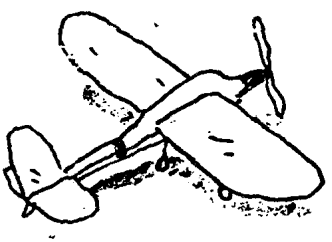
発行者:福武總一郎

Published by Fukutake Pub.,Co.,Ltd.,Tokyo, JAPAN.
ISBN4-8288-1311-X C8397 ¥1100E

ぼくはきみの友だちだ

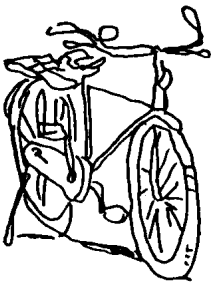
我是你的朋友

劉心武（リウ シン ウー）作　石田稔訳　永沢まこと絵



福武書店

「ぼくはきみの友だちだ」目次



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一、ぼくの写真を見せてあげる——7
二、どうして、まちがった答えの人がほめられて、正しい答えの人がしかられたのか？——23
三、最後の紙ロケット——34
四、星がぼくに笑いかけた——48
五、金魚のはらいた——61

六、色とりどりの戦闘機――74
七、窓の外へ投げすてられた消しゴム――87
八、ぼくたちみんなのおばあちゃん――99
九、「勇士たちよ、トーチカにむかって突撃しよう！」――113
十、「ぼくに手かげんしないでね。」――127
十一、三びきのチョウ――138
十二、もう一枚、写真を見せてあげる――152
訳者あとがき――168
挿絵・永沢まこと

我是你的朋友
劉心武著
この作品は1980年に
北京出版社より出版された。

一　ぼくの写真を見せてあげる

「ぼくはきみの友だちだよ」といったら、きみはきっと、「ちがうよ」と手をふるだろう。「あったこともないのに、どうして友だちなもんか」とね。

なーに、そんなのかんたんじゃないか。あったことがなかったなら、ぼくの写真を見せてあげる。これで、きみはぼくを知っていることになるだろう。

たくさんあるぼくの写真のうちから、どれを見せたらいいかなぁ。

一番かんたんなのは、新学期がはじまる前にとった顔だけの小さな写真を、きみに見せることだ。その写真を見れば、ぼくの顔がまんまるで、目は大きくてくりくりしていることが、すぐわかる。それから、耳は半円形で、二つあわせれば、すっかりまんまるになる。おとなたち

は、大きくて横にとびだした耳だといっている。ぼくの鼻の頭は、まんまるってわけじゃない。ニンニクに形がにているって、よくいわれる。口のほうは、みんなから、大口だっていわれている。——どう、ぼくの顔つきがどんなか、きみの心にイメージができあがっただろ？

けれども、この顔だけの小さな写真を、きみにあげるのはよそう。こういう写真では、その人がどんな人なのかはわからない。おなじ建物に住んでいる方おじさんの、顔だけの小さな写真を見ると、がっちりとして見えるけど、おじさんは、実は、二本の松葉杖をついた身体障害者なんだ。だから、ある人のほんとうのすがたを知りたかったら、体全体をうつした写真を見るのが、一番だ。

でも、ぼくの手もとには、体全体をとった写真がないんだ。しかたがない。ぼくのわりかし気に入っている、上半身だけの写真をきみにお見せしよう。（ことわっておくけど、ぼくの体はどこも不自由なところはないよ。）これは、北海公園でうつしたんだ。

この写真がとられるまでのいきさつを話したら、ちょっとした物語になる。

去年の、もうすぐ夏休みがおわろうとしていたある日、いとこの王立東が、いっしょに北海

公園に写真をとりにいかないかと、さそいにきた。王立東は、ぼくより五歳年上で、まもなく、高校に進むことになっていた。立東は、写真に夢中で、夏休みのあいだじゅう、毎日のように、お父さんのカメラを首に下げ、ポケットには『撮影ポケットブック』という本をつっこんで、いろんなところにうつしにいっていた。とってくると、自分で、現像もひきのばしもやる。できた写真は、どれもなかなかたいしたものだ。

王立東と北海公園にいくみちみち、今日は、とびっきりすばらしいぼくの写真を、何枚かきっととってもらおう、とぼくは考えていた。

その日の北海公園は、人出も多くなく、あい色の池にはさざなみが立ち、セミは、緑の林の中でせいいっぱい鳴きたて、バラの花は、花だんでみずみずしく咲きほこっていた。池の中の島にある白い塔は、いつもとおなじように、おなかをふくらまし、首をのばして、そびえたっていた。きっと、おもしろいあそびでもしていたのだろう、カササギが、ジジッ、チチッと鳴きかわしながら、つぎつぎとむれをなして、並木道の上を飛んでいった。

いとこの王立東は、あずまやの前にぼくを立たせて、一枚とろうとした。ぼくは、気に入ら

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

なくて手をうちわのようにパタパタふった。今度は、ぼくを花だんのわきに立たせて、一枚とろうとした。とんでもない。ぼくは、頭をでんでん太鼓のように、ぶるぶるふった。――ぼくは、四年生の男の子なんだ。花なんかといっしょにうつされてたまるか。

「じゃあきみは、どんなのをとってほしいんだい？」

王立東が、きいてきた。

「とびっきりいいやつをさ。」

ぼくの頭の中には、たちまち、いろんな映画のシーンが浮かんできた。李向陽*が、中国を侵略した日本兵に、二丁拳銃をぶっぱなしているところ、登山隊員が、まっ黒いサングラスをかけて、高い峰めざしてのぼっていくところ、鄧世昌**が、軍艦のかじとりハンドルをにぎっているところ……。ふと、ぼくの目に、池をかこむさくのわきで風にゆれているしだれやなぎが、うつった。――そうだ、『いさましい偵察兵』になったところを、とってもらおう。

* 『平原ゲリラ隊』という映画の主人公。ゲリラ隊の隊長。

** 『日清戦争物語』という映画の主人公。清時代末期の海軍将校。

「あそこでとってよ。――ぼく、すぐ変装してくるから。」

ぼくはこうさけびながら、はねるようにして、しだれやなぎのほうへかけていった。

うしろからついてきた王立東は、ぼくから十歩ほどのところで足をとめ、カメラをかかえて、うつすものをきめたり、距離をあわせたり、しぼりとシャッター速度をどうしようかと考えたりしだした。ぼくはといえば、やなぎのえだを一本おって、それを頭にのせて偵察兵になるための、変装の輪を作りだした。

やなぎのえだをぐるぐるっと渦巻型にまいていったが、長さがたりない。ぼくは、手をのばして、もう一本やなぎのえだをおろうとした。ちょうどそのとき、こんな声がひびいてきた。

「あら、やなぎの木だって、とてもいたいのよ！」

ふりかえってみると、見たことのない、若い女の人だった。彼女は、うす緑色のテトロンのブラウスをきて、ショートカットの黒ぐろとしたかみに、青くかがやくヘアーバンドをしていた。顔はたまご形で、まゆげがふとくて、目はふたつの三日月のようだ。彼女は、にっこりほほえみながら、ぼくを見ている。

ぼくは、あいかわらず、やなぎのえだに手をかけながら、こう答えた。
「やなぎの木がいたがったりするもんか！」
「やなぎのえだは、やなぎの木のかみの毛のようなものよ。むやみにひきぬいたりして、いたくないかしら？　もし、だれかが、あなたのかみの毛をぎゅっとひきぬいたら、あなた、いたくない？」
「そんなことあるもんか！　ぼくは、ちゃんととこ屋さんにいって、かみをかってもらっているからね。――かみがのびたら、からなきゃいけないんだから、ぼくがやなぎのえだをおるのは、やなぎの木のかみをかってあげているようなものさ……。」
ぼくは、むきになって、いいあらそいをはじめた。ところがなんと、彼女のほうは少しもおこらず、はんたいに、顔をちょっと上にむけてフフッと笑いだした。笑いおわると、ぼくの顔を見て、いった。
「なるほど、もっともらしいりくつだこと！　だけど、あなたがこのやなぎのえだをおったのは、『変装の輪』を作るためだったんでしょう？」

うーん、彼女は、とっても頭が切れるぞ。

「そのとおり。」

ぼくは、うなずいていった。

「偵察兵が、やなぎのえだをおるのは、祖国を守るためさ。やなぎの木だって分別があれば、文句なんかいいっこないよ。」

若い女の人は、また笑った。どうやら、彼女は、ぼくを悪い子どもだとは思っていないようだ。でも、やっぱり、ぼくに賛成してくれているわけではない。

彼女は、しんぼう強く、またぼくに話しかけてきた。

「ここは公園でしょ。公園のやなぎの木は、あそびにきた人に見てもらうためのものだから、かってにおってはいけないのよ。もし、みんなが、すきかってにおったりしたら、公園の中の花も草も木も、ぜんぶなくなって、少しも公園らしくなくなってしまうんじゃない？」

そのとおりだ。だけど、ぼくには、心でまちがいだとわかっていても、強情をはって口ごたえするという、欠点がある。

ぼくは、へりくつをこねた。
「とにかく、ぼくみたいなのは特別さ。公園にやってきた人が、みんな偵察兵になりたがるなんてことは、ありっこないよ。」
いいあらそっているところへ、いとこがちょうどやってきた。そして、ぼくの手からやなぎのえだをとって、ぽいっとむこうへほうり投げた。それから、若い女の人にむかっていった。
「さあ、もういいでしょう。ぼくたち、もう偵察兵に変装したりしませんから。」
いとこは、別の場所で写真をとろうとした。ぼくは、まったくふゆかいだった。でこぼこした大きな石をつみかさねたがけの前まできたとき、ぼくはやっと、また写真をとってもらおうという気になった。
ぼくは、頂上まではいのぼって、登山隊員のポーズをとることにした。——この写真は、偵察兵のより、ずっといいぞ！
ぼくが、がけをよじのぼりかけると、なんと、またあの女の人の声がひびいてきた。
「おっとっと、落ちないように気をつけなさい！」

ぼくは、彼女のほうをふりむいた。かっかっとはらが立ってきた。

「なんだって、ぼくのことをみはっているんだ？　ぼくが、あなたになにか悪いことでもしたかい？」

ところが彼女は、少しもおこらず、あいかわらずにこにこしている。

「わたしも偵察兵になっちゃいけなくって？　あなたが、また公園のきまりをやぶるんじゃないかと心配で、それであとをつけてきたのよ。」

「なんていわれたって、ぼくはのぼるんだ！」

「ここにある札が、目に入らなかったの？　ほら、『石によじのぼることを禁じる』と、書いてあるじゃない。」

「登山隊員のぼくがエベレストにのぼるのを、いったいだれが禁止できるんだい？」

「登山隊員にとって一番大切なことは、きまりを守るっていうことよ。」

「ともかく、ぼくはのぼるんだ！」

「足をふみはずして落っこちたら、せなかに大きなコブを作ってしまうわよ！」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com